種の自己否定性と「切断」の概念

竹花　洋佑

はじめに

「私の哲学思想の総決算的告白」（十二・三三二）(1) と呼ばれた田辺元の晩年の著作『数理の歴史主義展開――数学基礎論覚書――』（一九五四年）の「後記」の中で、田辺は自身の思想の歩みに決定的な影響を与えた〝二人の師〟についてふれている。言うまでもなく一人は西田幾多郎である。哲学に対する眼を開かせてくれながらも後に背くことになったこの〝師〟の他に、田辺はもう一人の〝師〟の名前を挙げている。それは、近代日本数学の父と呼ばれる高木貞治（一八七五－一九六〇年）である。田辺は次のように振り返る。

> 数学に対する愛を私に吹込まれたのは、学界の至宝として今も健在せられる高木貞治先生であった。先生の最も早い頃の名著『新式算術講義』は、初めて純粋なる数学の美しさを私に教えたものである。私はその美に引き着けられて数学を学ぼうと志したのである。デデキントの切断論が、ほとんど私の一生を貫く問題となったほどに強い印象を与えたのも、外ならぬ先生の解説を通じてであった（同）。

ここで言われる「デデキントの切断論」とは、ドイツの数学者リヒャルト・デデキント（Richard Dedekind, 1831–1916）が実数の定義に際して用いた議論を指す。この「切断」の概念を核にして、数学の歴史主義的理解という極めて独特な主張がこの書において展開されることになる。ただ、これは数学基礎論を主題とするこの著作の中で突如として登場したものではない。田辺が「ほとんど私の一生を貫く問題となった」と述懐しているように、この「切断」の問題は常に田辺の思索の傍にあり続けたものであったといえる。しかも、それは単に数学論の分野に限って彼の思想の導きの糸となったものではなく、田辺の哲学の根幹部分に深くかかわったものである(2)。「切断」が「それ自身無なるナイフ」（十二・三二一）とか「自己否定的無の主体の行為に対する象徴」（同）と表現されることからも明らかなように、それは「無」や行為といった田辺哲学の最重要概念に結びついている。すでに指摘されているように(3)、デデキントの「切断」という問題は田辺の思索の背後にあってそれを導く一つの大きなイメージの源泉という役割を果たしていると言うこともできるだろう。

このように「切断」という問題が田辺哲学の核心に深く食い込むものであるとすれば、問題はそのあり方が実際にどのようなものなのかということであろう。つまり、単なる比喩やイメージにとどまらない「切断」概念の哲学的な意味合いはどのようなものであるのか、このことがさらに問われなければならない。その意味は田辺の数学基礎論理解および『数理の歴史主義展開』における彼の数理哲学の内実の把握を通してはじめて明らかとなるものであるが(4)、それと同時にあるいはその前提として論じられるべきは、どの時点でそしていかなる内的な必然性からこの「切断」という問題が田辺の哲学と不可分なものとなったのかということであろう。もちろん後に指摘するように、田辺はその思索の最初期からデデキントの「切断」に注目している。しかしながら、戦後の著書の中で盛んに論じられる「切断」が田辺哲学固有の一概念である以上、当初の注目の仕方がそのまま戦後の「切断」概念と連続的につながるわけでは

ない。そうである以上、「切断」という問題への関心は底流として保持されているといえるにしても、田辺がこの概念に独自の意味を込めた時点があるはずである。その時点とは、「種の論理」の第四論文「論理の社会存在論的構造」（一九三六年十〇－十二月）であり、そこでの中心概念である種の自己否定性こそ「切断」を田辺哲学固有の概念へと押し上げたものである。これが本稿のとる立場である。以下でこのことを具体的に明らかにしていこう。

一・「種の論理」の修正

この「論理の社会存在論的構造」という論文はそれまでの「種の論理」の議論の単なる延長線上に位置するものではない。これは以前の主張の枠組みを修正するという意図に基づいて書かれたものであり、種の自己否定性とは直接的にはその修正の結果として生み出された概念である。

田辺が「種の論理」の修正に向かわざるを得なかったのは、それまでの議論においては個体の本質が二重に捉えられているという不整合が存在していたためである。種的な共同体のうちにあるその成員はそのままのあり方では決して個ではありえず、自らの「直接の母体であり発生の根源である種」（六・七〇）に背きそこから「分立」することによってはじめて個体たり得る。これが当初の田辺の主張であった。そして、その場合個の個体性たる所以を形成するもの、つまり「個体化の原理」（六・三〇八）として考えられていたのは、「他を支配し全体を我に独占して我の統轄の下に置かんとする権力意志 Wille zur Macht」（六・一一八）である。しかし同時に田辺は、このような「権力意志」の主体としての個がなおも否定されるべきことを主張する。そこに国家の理念をなす普遍的な共同性の構成者としての「真の個」が成立する。

種によって個と類が媒介されるということは、それによって個が類的な本質を獲得するということを意味する。この「種の論理」の根幹的な主張を維持しようとするならば、「権力意志」を個体形成の条件と考える前者の発想を放棄せざるをえないことになる。田辺は自らの立場の未熟さが「個が直接に種と否定的対立をなすと考えることの困難に原因する」（六・三一二）ことを率直に認め、あくまで「個は既に媒介せられたものなるが故に、それは同時に普遍を実現するものであり、其意味に於て普遍たるのである」（同）という主張を維持しようとする。ヘーゲルのいう「個別は普遍である」(Das Einzelne ist das Allgemeine.)という判断を「種の論理」の論理的構造のモデルとする田辺にとって、個体性の本質は種との関係でなく普遍性との関係で問題にされるべき事柄なのであり、それ故田辺はこれまでのような「個が種を直接に否定するという命題を抹殺」（六・三一四）しなければならないと考えたのである。

このように「権力意志」の主体のあり方を個体性の本質そのものと考える立場が否定されたことによって、それまで田辺の哲学において重要な位置を占めてきた個体の悪や偶然性の問題が背後に退いてしまっているということは確かであろう(5)。こうした個の有限性が普遍的なものと結びつく議論は『懺悔道としての哲学』（一九四六年）を待たなければならない。さらに、種と否定的対立するものは個ではありえないということが明確に主張されたことによって、個における種の否定的な現れの構造を分析する「世界図式論」の成立する余地はこれまでのような仕方では存在しなくなってしまっている(6)。

しかしながら、この個体性の本質の修正は単に「種の論理」の後退であるばかりではない。種の概念そのものに関していえば、それは種の構造を原理的に捉え直す決定的な契機となったといえる。種と直接的に対立するものが「それ自身個と称せられ得べきものではなかった」（六・三一四）とすれば、つまりそれがいまだ個体に至らざる種に他ならないとすれば、それまで種と個の否定的な相克として描かれた事態は種と種との否定的関係として問題にされなけ

ればならない。すなわち、「種を否定するものも種そのものなのであって種以外のものではあり得ない」（六・三一三）のである。このように、当初の個の種からの「分立」という事態を種それ自身の構造として理解し直すことは、明らかに「生命の直接態」（六・一〇一）という当初の一元的な規定では捉えきれない事柄を種に盛り込むことになる。したがって、「我々が従来種を連続的全体として原始的統一性をもつものであると考えた思想は、少なからず重要なる制限を加えられ訂正を受けなければならぬ」（六・三一五）ことになるのである。種の自己否定性とはこのような脈絡で提唱された考え方なのである。

二．種の自己否定的構造

田辺によれば、「種は自己の外にそれを否定するものを有するのではなくそれ自身の内にそれを否定するものをもつ」（六・三一三）。このような種の自己否定性は「更にそれ以上に之を原理付けるものを有しない」（同）のであり、それは「ただ斯かるものとして承認せられる外無きもの」（同）といわれる。田辺はこのような種の「原始的なる弁証法」（六・三一五）の構造を次のような「二重の対立性」として特徴付けている。

> 種は自己否定の原理に由り分裂することをそれの本質とするものである以上、その全体の如何なる部分をとって見ても必ず肯定的と否定的との力の抗争が含まれ、此抗争に由るそれの否定的対立への分裂と之に反対する全体の統一性とが必ず相伴うものだからである。種は全く相反対する力の対立抗争に由って常に分裂しようとしながら而も反対にその分裂に対立して統一を保とうとする力のはたらく、二重の対立性を含む所の不断の運動で

あって、決して単に静止する固定的統一とは考えられない（六・三一五）。

田辺がここで種の自己否定性をあえて対立の二重性という構造において捉えようとするのは何故なのか。それは、種の自己否定があくまでも種それ自身の内部において生起する事態であるということ、言い換えれば、種は外部を持たないということを明確に言い表すために他ならない。田辺は種の自己否定的構造を理解するに際して、種の自己否定と種の種に対する否定的対立とを区別すべきことを強調する。田辺によれば、前者が「内包的対立性」（六・三二〇）であるのに対して、後者は「外延的対立」（同）と呼ばれるべきものである。

「種の自己否定は種の種を否定することに相違ないが、さりとて種の種に対する否定的対立が必ず種の自己に対する否定であるとはいわれない」（六・三一八）と田辺はいう。種の否定性があくまでも自己否定であるためには、否定しあう種は同一の種であるということが保証されていなければならない。これに対して、単純に種と種とが否定的対立するというだけでは、両者の異他性が含意されてしまう。なるほど、種の自己否定も種相互の否定であることには変わりない(7)。しかしそれだけならば、種の否定性は自らをどこまでも分散させることで「自己の喪失」（六・三一九）をもたらしてしまうことになる。したがって、対立に対して逆方向にはたらくもう一つの力が想定されなければ、そもそも種の自己否定ということがいわれえない。田辺の言葉を用いれば、「それ〔種〕が自己の分裂と呼ばれ、自己が自己に対立するとして相対立する自己が共に自己と名けられるのは、猶自己の統一が何等かの程度於て残存するから」（同、傍点は田辺自身によるもの）なのである。

もし種の否定構造が「外延的対立」として描かれるとするならば、そのことによって種が自らの内に重層的な分裂を作り出していくということは表現できるだろう。しかし、それだけではこの無限の分裂を自らのうちに無限に織り

込んでいるものが依然として種であるという側面は十分に表現されない。むしろ、このような単なる対立性は種が次々と自らのうちに自らの外部を生み出してくということを意味するのであって、それは対立の生じる場が種であるという側面を掘り崩してしまうことにつながる。田辺の考えによれば、種は外ないしは他との関係が絶えず作り出されることで形成されるような境界あるいは限界といったものを持たない。つまり、種はその極大の領域においてもその極小の領域においてもその「内包的対立性」という特質が維持される限りは、どこまでいっても種なのである。あるいはより厳密にいえば、「二重の対立性」において存在するものは、それがどのような領域にあるものだとしても、依然として種でありつづける。このことは田辺において、「種の統一は種の自己否定に由り自己の内部に無限の層をなして自己とその否定者との交互的緊張を張渡し、横に自己と其否定との対立する均衡を、縦に自己自身の内部に無限の層を成して重ね合わせる如き構造をもつと云ってよい」（六・三二〇―三二一）と表現されている。

ただし、田辺が繰り返し主張するように、種の対立に対して自己を保持しようとする統合性は種の対立性を静止にもたらすものではなく、力の均衡状態を作り出すものであるから、種の自己否定性とは働きが一切存在しない状態と同一のものではない。それは、むしろ、「無限の運動が湧き立つ為めに動かんとしつつ動かれない運動の発起抑止の根源」（六・三一七）といわれるべきものなのである。あるいはこのことは海のイメージに託されて次のように語られる。

> 大海の波浪は寄せては返す反対運動が相重畳するに由って、海水の分子そのものは流れ去るのではなく同一の場所で起伏の運動をなるといわれる如く、種の自己否定の激動は変化をも不変と張合わせる動的緊張である（六・三二二）。

三、田辺におけるプラトン的質料の問題

このような種の自己否定性は「論理の社会存在論的構造」の後半部において土地の占有の問題と結びつけられることによって、「社会存在論」という文脈で具体化されることになる(8)。しかし、それ以前に田辺にとって問題であったのは、自己の外に向かっても内に向かっても幾重にも無限の層をなす種の自己否定的構造から種とは全く異質な個という次元が現れる仕方をいかに解明するのかということであった。種と対立することを本質とするそれまでの個のあり方を種そのものが内蔵する否定性として捉え返したのであるから、個の現れの仕方は種からの「分立」とは別のものでなければならないことになる。しかも、個体の本質の二重性という不備を解消した以上、そうした個の出現は同時に類的な全体性を可能にするものでなければならない。そのような意味での「個体化の原理」を支えるものこそがまさに「切断」に他ならない。

ただし、種の自己否定性と「切断」とは直ちに結びつくものではない。両者の間には田辺のプラトン哲学の理解、とりわけその質料の問題が横たわっている。この問題に目を配ることによってはじめてこの時期に田辺が「切断」概念に接近した理由が十分に理解されることになろう。田辺は「論理の社会存在論的構造」の中で種を質料の概念に対応させ、それがプラトンに由来にするものであることを幾度となく述べている。例えば、田辺は次のように述べる。

> プラトンのティマイオス篇に於ける場所（空間）にして錯動原因たる質料が、私の意味に於ける自己否定的質料に相当することは前に述べた如くである。これはフィレボス篇に於て超過不足の二と規定せられた質料にも相当すること明かである（六・三三七）。

この「自己否定的質料」が種であることは、「弁証法を実践的存在の論理として具体的ならしむる為には、自己否定的種を質料としてはっきり認めることが必要である」(六・三五四)という田辺の発言からも明らかである。田辺にとって、プラトンの質料概念は種の単なる比喩ではない。多くのプラトン研究者の諸説を実際に紹介しながら、ここで後期プラトンの解釈をめぐる詳細な議論を展開するのは（六・三三七―三四三）、それが「単に歴史的興味を有するのみならず弁証法の存在論にとって原理的重要性を有する」（六・三三七）と田辺が確信しているからに他ならない。

こうした種の概念とプラトン哲学とのつながりに関してまず指摘されるべきは、両者の関係は決して種の自己否定性という概念の提起をもってはじまるのではないという点である。田辺の種という概念は、そもそもプラトンにおける質料的なものを念頭において提起されたのである。その場合、種とプラトン的質料との間にはシェリングのいわゆる『自由論』におけるプラトン解釈が介在している。シェリングがこの書において「プラトンの質料」（die Materie des Platon）と同じものとみなす「波立ち沸きかえる海原」(ein wogend wallend Meer) は(9)、「神における自然」(Natur in Gott) あるいは神の実存の「根底」(Grund) の比喩的表現であるが、田辺が「西田先生の教を仰ぐ」（一九三〇年）で西田の「絶対無の自覚」に対して語った「否定原理」「闇の原理」はシェリングのこの概念をふまえたものである。田辺の種という発想は、もっとも広く捉えるならばこの概念に由来すると考えることができる(10)。したがって、直接はテンソルの力学的構造を指しながら、「シェリングが『人間的自由の本質に就いて』の論文に於て、プラトンのティマイオス篇の質料を狂瀾怒濤の大海に比した其比喩の正確なる意味は、此の如きものでなければならぬ」（六・三二一）と語られる場合には、種の自己否定性こそこれまで比喩的に問題にしてきたプラトンの質料のあり方に明確な論理的規定を与えるものであるという確信が、田辺にはあったと見ることができる。こうした「動的緊張」、ないしは「動的均衡」（六・三五六）としての大海という場の構造は、最晩年の『マラルメ覚書』（一九六一年）まで維持

される(11)。

そして同時に留意されるべきことは、「種の論理」の時期に限って言うならば、田辺の質料概念の理解には揺れがあるということである。田辺は「種の論理」を提唱した当初から、種の問題と古代哲学の質料概念とを重ね合わせて理解しようとしている（六・一〇四―一一二）。ただその際は、必ずしも種とプラトン的質料とが明確な連関において考えられていたわけではない。むしろ、この時期の田辺はプラトンよりもアリストテレスの思想を評価している。例えば、「種の論理」の第三論文「存在論の第三段階」（一九三五年十一月）の中で、「有機的存在を重視することが、彼〔アリストテレス〕に於て創始的なる意味を有する」とした直後に、「種的基体の概念をここに由来せしめても大過あるまい」（六・二七三）と述べている。さらに、この基体を質料と重ね合わせながら、「アリストテレスの質料はプラトンの場所の如く物から引き離されるものではなく、物の存在に入り込み之を成立せしめる契機」であり、「それは物がそれに於て其形相を実現する媒質であり、其上に物の生滅変化が成立つ基体である」（同）ともいわれている。

種の自己否定性という発想の登場と、それに対応させられる質料概念の内実がアリストテレスからプラトンへと転換したことは軌を一にしている。主体としての個に対する基体が種であるというテーゼは「種の論理」を貫く主張である。ただし、初期の「種の論理」においては、上のアリストテレス理解にも見られるように、種的基体は、個が実現する非連続性の媒体となるような連続性として想定されていた。「既に非連続ということが連続的なる媒介の上でいわれるのである。全く無媒介なるものは非連続ということも出来ぬ」（六・一九二）という言葉からも推察されるように、種的基体の連続的な性格は、西田の「非連続の連続」という概念に対する批判として機能している。しかし、「種の論理」の修正を経て明らかにされた否定性を幾重にも内包した種の構造は、それまでの単なる連続的な媒質あるいは「一次元的統一」（六・一〇九）にもはや対応するものではありえない。それに伴って、田辺はアリストテレスに託

そうとした質料理解から離れたのである。このようなアリストテレスからの離脱が同時にプラトンへの接近でありえたのは、プラトンの質料が「不定の二」（ἀόριστος δυάς）という構造を備えていたためであると推察される。この「不定の二」こそ、種の自己否定性と「切断」の概念を橋渡ししたものに他ならない。

そもそも質料（ὕλη）という言葉はアリストテレスがはじめて哲学的概念として用いたものであるから、プラトンの思想を質料という概念枠を通してとらえること自身が問題であろう。また、田辺は『ティマイオス』の「コーラ」、『ピレボス』における「大‐小」「超過不足」さらに『ソピステス』における「非有」（あらぬもの）を全て質料として把握するが、この理解の妥当性についても詳細な検討が必要である(12)。田辺のプラトン理解の妥当性を精査することではなく、いわゆるプラトンの質料と種概念との内面的なつながりを明らかにすることがここでの目的であるので、こうした問題を扱うことは差し当たり控えて議論を進めていこう。今挙げたプラトンにおける三つの質料概念の中で、「不定の二」にかかわるのは『ピレボス』で述べられる「大‐小」という問題である。

プラトンはこの対話編の中で存在するものを四つの類に分けて捉えている。すなわち、（一）「無限」（二）「限度」（三）「それらから混合されて生成した存在」（四）「混合と生成の原因」の四つである(13)。「大‐小」は第一類の「無限」のあり方としていわれるものである。すなわち、プラトンによれば「無限なるもの」においては何らかの「限度」というものを認めることができず、「いつだって、『もっと熱い』の中にも、『もっと冷たい』の中にも、『もっと（多く）、もっと（少なく）』が内在している」(14)。ここで「もっと（多く）、もっと（少なく）」（τὸ μᾶλλον καὶ ἧττον）と言われているのが、田辺が「大‐小」あるいは「超過不足」という場合に考えられているものである。

しかし、この「もっと（多く）、もっと（少なく）」を「大‐小」と捉えかえし、それに「不定の二」という呼称を与えたのはアリストテレスである。彼は『形而上学』において、質料としての「大‐小」と形相としての「一」をプ

ラトンは存在の原理として考えたとした上で次のように述べている。すなわち、ピタゴタス学派とプラトンは数をあらゆるものの構成要素であるとしている点では一致しているが、「かれら〔ピタゴラスの徒〕が無限なものを『一』であるのとしたのに反しかれ〔プラトン〕は『二』をたてて、無限なものはこの『大と小と』（τὸ μέγα καὶ τὸ μικρόν）から成るとした、この点はかれ独特である」(15)。このような形相としての「一」と区別された質料としての「大‐小」という「二」がアリストテレスにおいて「不定の二」と呼ばれるものであり、アリストテレスは、この「一」と「不定の二」という二つの原理によって数が成り立つとするのがプラトンの説であると考える(16)。こうしたアリストテレスの説とこれに依拠する解釈者の理解を念頭におきながら、田辺は外にも内にも限界や境界を形成することなく無限に広がる種の自己否定性に、このプラトンの「不定の二」との構造的な類似性を見ている。このことは田辺の次の説明からも明らかであろう。

> プラトンの後期ディアレクティケーに於ける質量の『大‐小』『不定の二』とは、斯かる反対の間に動揺する対立性の場面を意味するというべきであろう。それは場所でありながら反対方向への分極性を含み、対立間の緊張動揺に震う場所である（五・二九六―二九七）。

四．「不定の二」とデデキントの「切断」

それでは、なぜこの「不定の二」という概念が種の自己否定性と「切断」とを結びつける触媒の役割を果たしうるのか。それは、「不定の二」としての質料あるいはプラトンのイデア数論の理解の一つの可能性として「切断」概念を用い

る解釈があるからである。そのような可能性を提示したのがテイラー(Alfred Edward Taylor, 1869–1945)である(17)。田辺がテイラーの説にプラトンの質料つまり「不定の二」と「切断」との接点をみていることは、次の文章から知られる。

> 質料の自己否定的動揺が斯かる否定の『二』として規定せられることは、当然それが右に述べた［直前に述べられた田辺の連続論の考察を指す］有理数系列の切断を規定する超過不足の両方向の自己否定的合一を想わしめること、テイラーの説を俟たない。寧ろ氏が採るデデキントの古典的見地に拠る切断の非弁証法的なるに比して、プラトンの質料は一層よく右に述べたような弁証法的見地に適合するのである（六・三三七）。

一般に、すべての数を下組と上組とに分け、下組に属する数が上組に属するどの数よりも小さくなるようにするとき、このような分割が「切断」(Schnitt) と呼ばれる。このような組分けを直線上の点に対応させた際に、「切断」によって境界となるような点がただ一点だけ存在するということを、連続性の本質とデデキントは捉える。別の言い方をすれば、直線を切った場合にその切り口は必ず下組か上組のどちらかに含まれているということが、連続しているということである(18)。今仮に有理数の全体だけで数の体系が完成すると想定してみる。もしこの仮定が正しいとすれば、「切断」によって常に何からの有理数の一点が直線上に定まることになる。つまり、切り口はいずれかの組に必ず含まれていることになる。しかし、切断による組分けの中に境となる点が一点に定まらないものがあるとすれば、それは有理数ではない数の存在を示すことになる（無理数の存在をあらかじめ前提として考えるならば、実際には例えば$\sqrt{3}$にどこまでも近い有理数を考えることができる。この場合には切り口の存在しない「切断」が起こってしまうこと

になる。つまり、下組には最大値はなく、上組には最小値がないような「切断」が生じる)。すなわち、その数が無理数であり、このような仕方で無理数が定義されることによって実数の連続性が理解される。これがデデキントの発想の要旨である(19)。田辺はこうした「切断」の意味を次のように説明している(『岩波哲学辞典』(一九二二年での記述)。

今直線上の凡ての点を二群に分ち第一群に属する如何なる点も第二群に属する凡ての点の左にある如くにするならば、斯かる分ちを切断というのであるが、斯様な切断の如何なるものに対しても之を生ずる点は一つ、而も唯一つ存在するということが直線の点連続体なることを表わす。次に凡ての有理数を二群に分ち第一群の如何なる数も第二群の凡ての数より小ならしむる如き分ち即ち切断を生ずる数が、常に唯一つ存在する為には、吾人は有理数の外に無理数を考えなければならぬ(十五・四四七)。

テイラーの解釈の特徴は、このような切断による実数の定義を無理数が連分数のかたちで表現されることに結びつけて捉えようとする点にある(ただし、テイラーはデデキントの名前を直接挙げることはしていない)。テイラーはこのことを$\sqrt{2}$(= 1.41421…)の連分数を例にとって説明する(20)。この連分数の展開において次々に現われてくる分数を順番に計算すれば、1, 3/2 (=1.5), 7/5 (=1.4), 17/12 (=1.41666…), 41/29 (=1.41379…), 99/70 (=1.41428…)…となる。テイラーが注目したのは、ここで現われる各項が、交互に$\sqrt{2}$より小さくなったり$\sqrt{2}$より大きくなったりしながら、限りなく$\sqrt{2}$に近づいていくことであり、これをテイラーはプラトンの「大‐小」つまり「不定の二」と解釈しようとするのである。テイラーによれば、$\sqrt{2}$の連分数展開において現われる全ての分数は、その平方が二よりも小さい組(class)と、その平方が二よりも大きい組とに分けられる。この時、現われてくるいずれの項も、必ずこ

のいずれかの組に属しているが、前者の組には最大の項はなく、後者の組には最小の項はない(21)。テイラーはこのように考え、二つの組の「分割」(section)が無理数$\sqrt{2}$を定義するとした上で、次のように述べる。

この分割は『二』あるいは『大と小』を含んでいる。つまり、特定の値よりも少ない全ての項を有する集合と特定の値よりも大きい全ての項を有する集合との二つの集合を含んでいる。しかもこの『二』は、一方の集合は最大の項をもたず他方の集合は最小の項をもたないという理由で『不定』である。このような分割が『二』によって分数の『大‐小』を規定することであるのは、まさしくこの分割がなされるまさにそのところでそれが明確な『切断』(cut)をなすからである。他の切断は系列の他のところでなされることができ、その各々が異なった『実数』を定義することになる(22)。

五．「個体化の原理」としての「切断」

歴史的に様々な解釈を呼び起こしてきたプラトンの「不定の二」、あるいは彼のイデア数論の理解として、このようなテイラーの解釈が妥当なものなのかどうかをここで確定することはできない(23)。実をいえば、この解釈を取り上げる田辺自身も、「数学ト哲学トノ関係」(一九三四年五月)においては、近代数学の概念をもってプラトンのイデア数論を理解しようとするテイラーの立場を、「ソノ〔プラトン〕いでや数論ヲ以テでできんとノ切断説ニ比スベキモノトスルノ不可ナルハ、イウマデモナイ」(五・二八)と否定的に評価している。あるいは、「古代哲学の質料概念と現代物理学」(一九三五年十〇月)においては、テイラーとテプリッツ(Otto Toeplitz, 1881‐1940)とを比較しな

がら、プラトンの「一」を近代数学の「切断」の概念をもって理解しようとする前者の説ではなく、あくまでも歴史的に「一」を比の概念において捉えようとする後者の説に軍配を上げている（五・二九六）[24]。にもかかわらず、上の引用で確認したように、「論理の社会存在論的構造」（一九三六年十〇－十二月）において、田辺はテイラーを引き合いに出しながら、「一」と「不定の二」をめぐる問題が、「切断」概念によって捉えられる理解を当然の前提であるかのように語っている。この態度変更の間に存在する田辺の思想上の変化とは、種を自己否定的なものとして新たに捉え直したことである。確かに、すでに指摘されているように[25]、田辺のデデキントの「切断」概念それ自体への注目あるいは評価は、一九二二年に発表された「実在の無限連続性」にまでさかのぼることができる[26]。しかしながら、「切断」の問題が数学論の文脈で語られることはあったとしても、田辺がその都度取り組んでいた哲学的な課題にそれが密接にかかわるという事態は、「種」概念の修正が行われたこの「論理の社会存在論的構造」において、はじめて生じたといえる[27]。田辺自身が認めているように（六・三三一）、「種の論理」はその提唱当初から、数学における連続の問題を発想の源泉としてきたが、管見によれば、これ以前の「種の論理」の諸論考において田辺が「切断」を自説に結び付けている箇所は見受けられない。あるいは、仮にこれ以前に「切断」が田辺の思想の核心部分に結びつくものと解釈されうるとしても、「切断」の問題がプラトンの質料の概念を介して種の問題と結合したのは、この時期以降である。それ以後の田辺の「切断」概念が、常に種ないしはプラトンの質料と並べて議論されることを考慮するならば[28]、この「論理の社会存在論的構造」で説かれる種の自己否定性が、「切断」の問題を田辺の思想の中心部に押しあげた決定的な要因であると考えることができるだろう。すでに述べたように、この「切断」が自己否定的な種との関係で「個体化の原理」の意味を担っているということが、こうした事情の思想的背景である。では、「切断」がどのような意味で「個体化の原理」となりえているのだろうか。このことを、以下、検討していくことにしよう。「切

断」に関して田辺の考えが集約的に示されているのは以下の箇所である。

無理数の切断は固定せられた直接存在でなくして、自己否定的なる種の矛盾的に対立する二つの契機としての有理数の反対方向をもつ系列を交互否定の無の底から行為に於て有に転じ、絶対否定の肯定に統一したものである。それは交互的に否定し合う絶対的に対立するものの統一として、連続の要素となるのである。その対立を統一する原理は絶対否定的統一性であるから、反対の間を張渡す基体としての種はそれに於て一たび絶対に否定せられるのである。その絶対否定の底から肯定的なる統一が行為的にはたらき出すのが個の切断に外ならない。基体の否定の底から主体が生まれるのである。基体即主体とは此転換を謂う（六・三四六）。

この田辺の言葉から、有理数が基体としての種に、そして無理数が主体としての個に対応するものと想定されていることがわかる。さらに、「切断」が個体の行為として考えられていることもはっきりと見て取ることができる。この文章は「論理の社会存在論的構造」の中で、はじめて「切断」の概念を自らの立場に引き寄せて用いた箇所であり、そしておそらくは、「切断」が個体の行為に比される最初の地点である。「切断とは行為の立場である」（九・四五〇）という後の田辺哲学の主要テーゼが語りだされてくる現場が、まさにここであるといってよい。もしこの田辺の文章をそれだけで読むならば、なぜ「切断」の媒体としての種が「矛盾的に対立する二つの契機としての有理数の反対方向をもつ系列」、あるいは「反対の間を張渡す基体」として描き出されねばならないのかという点が、十分に理解されないであろう。すでに見たように、デデキントのいう「切断」とは差し当たり単なる数の組分けである。したがって、たとえ種が有理数に相当するものだとしても、デデキント議論それ自体から、「切断」の前提としての〈有理数＝種〉が、

相互に矛盾し合う「反対方向をもつ系列」であるという主張が引き出されることは絶対にありえない。すでに見たように、その必然性は「切断」概念がプラトンの質料の問題をくぐり抜けることによってはじめて出てくるものである。

これらのことをふまえて、ここでの田辺の主張を実数の連続性とのアナロジーで示すとすれば、以下のようになろう。すなわち、「切断」によって無理数がただ一つに定まることが個体の形成にあたり、しかもそうした無理数の創造は、同時に実数の連続性が確証されることにあるから、個体形成は直ちにそのまま種的な全体性（有理数の全体）とは区別された、類的な全体性の出現を意味するということである。したがって、それまでの「種の論理」においては必ずしも明確に主張されえなかった、個の可能性が同時に類の可能性でもあるという構造が、まさにここで保証されることになったのである。ただし、両者の結合可能性を媒介しているものはあくまでも種である。田辺哲学のカテゴリーとしての「切断」のあり方を検討するに先立って、その前提となっている種を田辺の連続性理解との関係で捉えることで、まずは田辺が種の自己否定性に込めた真意に迫っていくことにしよう。

「如何に一般者を特殊化してもその特殊自身依然として一般者たる限り個体には達せられない」（六・三〇八）と言われるように、個体が種の無限分割の先端に存在するのではないということを、田辺は繰り返し述べている。このことを連続の問題との関係でいえば、直線がどこまでも分割されるということは連続の本質ではありえない（つまり、それだけでは決して無理数に到達しない）ということである。この点については、『零の発見』における吉田洋一の説明を借りることにしよう。

直線が連続体を形づくるというのはいかなる意味であるかを考えてみる。ともすれば、人はこれを『直前上のいかに近い二点をとっても、その間にかならず直線上の他の点が存在する』という意味に解しがちであるが、こ

れだけでは連続性の本質は決して表されていないことに、まず、注意する。実際これだけの性質ならば、いま説明した有理点全体だけで、すでにその性質をもっているのである(29)。

しかしながら他面において、無限可分性ということが連続性の本質そのものではないにしても、連続は差し当たりどこまでも分割可能ということが前提とされていなければ、そもそも無理数の創出など意味をもたない。田辺の言葉であえて表現するならば、連続の無限可分性とは、真の連続性の「否定的な媒介」なのである。田辺の種の自己否定性という議論は、連続が無限に分割可能であると考えられるとき、それがそもそもいかなる根拠に基づくものなのかを明らかにしたものである。次の「種の論理の意味を明にす」（一九三七年十〇―十二月）での言葉からも知られるように、そのような「種の無限可分性の根拠」（六・三一五）がすでに論じた「二重の対立性」に由来する自己否定性に他ならない。

> 無限可分というも、我々が勝手に幾らかでも連続を分割することが出来るという意味ではないことは、改めていう必要は無かろう。連続自身が無限の分裂であり、如何なる部分も連続として全体性をもち、統一が随所に要素として無限に重畳するからこそ、無限分割が可能となるのである。それは種の絶対分裂に基づくものに外ならない（六・五〇〇）。

ここで、重要なのは次の点である。実数の連続性が無理数の創出によってはじめて成立するということは、有理数全体に比される種の連続性は連続的であるように見えながら、実はいまだ連続的ではないものだということである。

したがって、種は真の連続性、つまり類的な全体性が成立するための媒介でありながら、後者が成立した時点から振り返るならば、それ自体は仮に存在するものとして想定されたにすぎない全体性であるといえる。つまり、種は仮構的な全体性なのである。「種に於ける自己否定の為に種がプラトンの質料の非有と呼ばれた意味に於て非有」（六・三二三）という性質をもつといわれるように、田辺は種を「非有」として特徴づけているが、連続の問題との関係でいえば、種は仮構的であるという意味で「あらぬもの」である。物理学とのアナロジーに関する文脈で、田辺が種を特徴づけるために用いた概念を持ち出すならは、種は「仮想的〔virtuel〕」（六・三二六）だということになる。

種は生として個の「母体」である限り、それは個にとって全体性という意味を担う。しかし、この直接的な全体性が、国家の理念に相当する普遍的な共同性と同一視されることがあってはならないと田辺は考える。そして、当初の生の全体性が、実は、特殊的なものつまり種にすぎないということを個体の働きによって示すというのが、田辺の「社会存在の論理」の一貫した主張である。しかし、生の全体性は、単に個の行為によってその特殊性があらわとなるだけではなく、それ自身の構造性においても、単なる直接的な全体性ではありえないという性質を有している。このように、種が仮構的なものであることを保証する概念として機能しているのが種の自己否定性である。

種の内から個という次元が立ち現れてくる仕方が「切断」として理解されるのは、すでに述べたように、「切断」による無理数の構成（個）が、同時に実数の連続性（類）を可能にするからである。このことは、「個は…否定を媒介とする肯定として恰も無理数の如き構造を有するものであるから、無理数が連続の創造的媒質を代表する行為的要素なる如く、要素にして全体を代表し、其自身創造的なるものでなければならぬ」（六・三七〇）という田辺の次の発言からも捉えられる。

田辺はこうした「切断」のあり方に、存在が非存在へと、そして非存在が存在へと相互に移行する転換の働きを捉

えようとする。前者の転換は、今述べた種の全体性が「仮想的」であることが明らかとなる事態を指している。これに対して後者の転換は、個が分割、ないしは一般の特殊化という仕方では決して到達されえず、むしろその前提となっている無限可分性という意味での連続性を否定することによって、はじめて掴まれうるという逆説を意味する。上述した「基体の否定の底から主体が生まれる」という「転換」の具体相とは、このようなものであろう。そして、同時にそれは、連続性を断ち切ることによって連続性を生み出すという逆説でもある。田辺の用語に従えば、「非連続の連続〔つまり「切断」のこと〕は連続の自己否定として連続の否定された極に於て却て連続が絶対否定的に成立する転換媒介を意味する」（六・三四七）のである。また、後の表現を用いれば、「連続の事態を解くために切断するというのは、切ることによって繋ぐ逆説に外ならない」（十三・三四五）ということである。

このような「切断」の概念に込められた転換性こそ、種の内部から個体が生成することの可能根拠にほかならない。なぜなら、まさにこの点において、存在が種的であることの本質要件たる自己否定性とは全く異質な否定性、つまり自己の無が自己の存在回復であるような事態が、現出しているからである。田辺の表現を用いれば、それは「外延的には可分なるものを却て不可分と思惟せしめる自己否定の絶対否定的肯定」（六・三三五）の原理であり、端的には自己否定と厳密に区別される絶対否定である。したがって、非存在ということがあらわとなる存在であるという意味で種が「有即無」（六・三二五）といわれるのに対して、個は「無即有」として、「自己の無に由って却て自己の有に達せる矛盾の統一」（六・三二三）であるといわれる。「個体化の原理が、自己の直接なる本質を否定して而も依然たる自己であるという自由創造的統一にある」（六・三一二）と述べられるのは、このような意味においてなのである。

「切断」が行為として解釈されるのも、絶対否定性として表現される転換の働きのゆえにほかならない。田辺は数学上の「切断」という概念に、何ものかを断ち切る個体の作用をアナロジカルに重ね合わせているのではない。そも

そも田辺が行為の本質として理解しているものが、「切断」に示される転換構造と同一性をもつのであって[30]、その逆ではない。例えば、「種の論理」が提唱される直前に書かれた「哲学への通路」（一九三三年）という小論においては、こうした行為の本質が次のように語られている。

> 自由が存在に随順し存在の内に死する自己否定活動は、自由を否定することに由って自由を肯定し、存在を肯定することに由って存在を否定する。此否定的転換の結果自由と存在との単なる対立は止揚せられて、両者の媒介統一が現前するのである。此転換が即ち行為に外ならない（五・十三－十四）。

田辺によれば、行為は「自由に発する存在の運動」（五・十二）と定義される。この自由という契機によって、行為は単なる運動や作用からはっきりと区別される。しかし、自由といっても、それはフィヒテの「知識学」の立場に示される通り、存在に全く依存することのない、自我の純粋な自己定立の活動ではありえない。むしろ、自由とは存在を媒介として、つまりその限りにおいて一度否定されながらも、そのこと通過することではじめて実現されるような「被媒介的自由」（五・十三）でなければならない。こうした自由のあり方において生じる転換のあり方が、田辺の考える行為の意味なのである。すなわち、転換性という構造をその本質としてもつ限り、田辺にとって「切断」とは行為を意味するものである。

さらに、この行為としての「切断」は同時に絶対無という問題とも触れ合うものであるが、この時点においては、この絶対無の問題は議論の前面には出てきていない[31]。絶対無の構造にこの転換という概念が重なりあうことになる戦後の思索において、この問題ははっきりと語られるのであるが、これについては機会を改めて論じることにした

い。

注

(1) 田辺元の著作からの引用は、『田邊元全集』(筑摩書房、一九六三-六四年)を用い、引用箇所を(巻・頁)と表記する。引用文中の旧漢字、旧仮名づかいは引用者の判断において現行表記に改めた。また、引用文中の傍点と亀甲括弧〔〕は全て引用者によるものである。

(2)「切断」の概念に注目した研究としては以下のものがある。合田正人「近迫と渦流—田辺元・ハイデッガー対決が今私たちに突きつけているもの—」(『思想』一〇五三号、岩波書店、二〇一二年)、同『田辺元とハイデガー—封印された哲学—』(PHP新書、二〇一三年)、林晋「『数理哲学』としての種の論理—田辺哲学のテキスト生成の試み(一)—」(『日本哲学史研究』第七号、二〇一〇年)、同「田辺元の数理哲学」(『思想』一〇五三号、岩波書店、二〇一二年)。

(3) 合田正人『田辺元とハイデガー』、四八-四九頁。

(4) 上記の林晋の二つの論稿は、このような視点から「切断」の問題を扱った研究である

(5) この点については、嶺秀樹『ハイデッガーと日本の哲学—和辻哲郎、九鬼周造、田辺元』(ミネルヴァ書房、二〇〇二年、二四八-二四九頁)を参照。

(6) 田辺によれば、「世界図式論」は「論理の主観的意識面」(六・二五八)であり、「個人の主体的自覚に直接顕なる論理の側面」(同)である。あるいは、「論理の絶対媒介が成立するのを直接個の立場に於て自覚すれば、それは依然図式論の形に現れる」(同)とも言われている。

(7) 田辺によれば、種がその内部に有する諸要素の関係は、厳密には「否定的対立」ではなくて「相違」である。なぜなら、諸要素は、「双方が両立共存するのであって、一が他を否定絶滅せんとする如きものではない」(六・三一九)からである。

田辺はこの区別に民族と階級の差異を重ね合わせている。それによれば、民族に比せられる種は、階級のように「本質上否定的に対立するのではなく単に相違しつつ並存する」（六・三一八）。

（8）この問題については、杉村靖彦「『種の論理』と『社会的なもの』の問い—田辺、ベルクソン、フランス社会学派—」（『日本哲学史研究』第十一号、二〇一四年）において詳しく論じられている。

（9）F.W.J. Schelling, *Philosophische Untersuchungen über das Wesen der menschlischen Freiheit und die damit zusammenhängenden Gegenstände, Sämmtliche Werke* Bd.7, hrsg. von K.F.A.Schelling. Stuttgart/Augsburg 1856 - 1861, S. 360.

（10）この点についての詳細は、拙稿「『種の論理』の生成と構造—媒介としての生—」（『思想』一〇五三号、岩波書店、二〇一二年、二六二-二六三頁）を参照。

（11）例えば、田辺は『マラルメ覚書』で次のように述べている。「シェリングの自由論に於ける、非合理性の根拠、悪の根源についての、『ティマイオス』篇に基づくプラトン的思想は、波浪逆巻く大海をその比喩に用いること、あたかも『双賽一擲』に於ける暴風と暗礁に由る難破の象徴に比すべく、詩人的哲学者〔シェリング〕と哲学者的詩人〔マラルメ〕との近似は、いよいよ我々を驚かさずには措かぬのである」（十三・二六一）。

（12）田辺自身も認めているように（五・二九二）、こうした理解はアリストテレスの『自然学』によるものである（アリストテレス『自然学』、第一巻第九章および第四巻二章）。

（13）プラトン『ピレボス』山田道夫訳、京都大学学術出版会、二〇〇五年、三七 - 四九頁（23c - 27c）。

（14）同書、三九頁（24b）。

（15）アリストテレス『形而上学』上、出隆訳、岩波文庫、一九五九年、四七頁（987b20）。亀甲括弧による挿入は引用者による。

（16）アリストテレス『形而上学』下、一九三頁（1081a10）または一九八頁（1082a10）。

（17）A. E. Taylor; “Forms and Numbers: A Study in Platonic Metaphysics”（1926）, *Philosophical Studies*, Macmillan and Co. London, 1934. *Plato: the man and his work*（1926）, Methuen & Co Ltd London,1960.

（18）この「切り口」という言い方は、瀬山士郎『「無限と連続」

の数学―微分積分学の基礎理論案内』(東京図書、二〇〇五年、四九‐五〇頁）に依拠している。

(19) デデキントの「切断」の概念については、吉田洋一『零の発見』(岩波新書、一九五六年)、小平邦彦『解析入門Ⅰ』(岩波書店、二〇〇三年)、高木貞治『定本 解析概論』(岩波書店、二〇一〇年）の説明に依拠している。

(20) 具体的には、

$$1+\cfrac{1}{2+\cfrac{1}{2+\cfrac{1}{2+\cfrac{1}{2+\sim}}}}$$

となる。

(21) A. E. Taylor, *Plato: the man and his work*, p.511.

(22) Ibid.

(23) 例えば、ロスはテイラーの解釈に致命的な欠陥が存在することを指摘している(W. D. ロス『プラトンのイデア論』、田島孝・新海邦治訳、哲書房、一九九六年、二五四頁)。

(24) プラトンのイデア数の問題の理解については、三宅剛一『学の世界と自然的世界』(みすず書房、一九七三年〔初版一九四〇年)）の第二章「イデアと数」での説明が極めて有益である。三宅によればこの章の大部分は、「哲学と数学との交渉」というタイトルで岩波講座『哲学』(一九三三年)に収録された論文がもととなっている（『学の世界と自然的世界』、vii頁)。田辺の「種の論理」とほぼ同時期に発表されたこの論文は、田辺が参照する諸家をほぼ完全に網羅している。

(25) 合田正人『田辺元とハイデガー』、五〇‐五一頁。

(26) 実際には次のように言われている。「若し夫れ哲学的に考えるならば連続ということの本質上系列の両側から内方に向って同一の極限を求めるデデキントの切断説の方が〔カントールの説よりも〕優越を保持すること明であるといわなければなるまい。私はあの単純にして而も犀利な思想を以て連続の難問題を解明した此数学者の洞察に感嘆を禁じ得ざるものである」(一・四六八)。

(27) 林晋も「論理の社会存在論的構造」において、それまでの「本来のデーデキントの切断、同一論理的な集合論の範囲での切断」が、田辺が自らの哲学的立場を読み込んだ「切断」概念に転換していることを指摘している（林晋「『数理哲学』としての種の論理―田辺哲学のテキスト生成の試み(一)―」、六七頁)。

(28) 例えば、『実存と愛と実践』の（一九四七年）の第三「プラトニズムの自己超克と福音信仰」の第三章および第四章（九・四三四－四五七）、『哲学と詩と宗教』（一九五三年～）の第三章（十三・三三五－三五三）、『数理の歴史主義展開』の第十三章（十二・三一一－三一九）など。

(29) 吉田洋一『零の発見』、一六四－一六五頁。ここで言われる「有理点」は次のように説明されている。「直線上において〇からの距離が長さの単位の整数倍もしくは分数倍に等しいすべての点に印をつけ、これらの点を総称して有理点を呼ぶことにする」（同書、一六四頁）。

(30) 転換性としての行為に関しては、細谷昌志『田辺哲学と京都学派―認識と生―』（昭和堂、二〇〇八年、六五－六八頁）参照。

(31) ただし、この段階においても極限概念を介して「切断」は無のあり方と関係している。